

昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成21年7月5日発行(毎月5日1回発行)
第49巻7月号(通巻600号)

風土



7

夏
鶯

神
蔵

器

谷やごとくに寺谷やごとくに夏鶯

尼寺や深閑として毛虫焼く

青梅の太る江ノ電軌むたび

羅の消えぬ鎌倉文学館

角ふつて鎌倉を出ぬ蝸牛

座禪待つ座布団五十涼しかり

三伏や獅子が啣へて恋みくじ

盃さかすきに厄割つて夏粉微塵

竹の子の穂先の熱しとの曇り

指差して鎌倉七口梅雨に入る

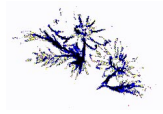
日盛りやサーフボードを立てて行く

立子には白花ほたるぶくろかな



竹間集

同人作品



「淡交」以後（七）

野沢しの武

納棺がたつきの映画爽やかに
邂逅の握手紅葉の展望台
冬支度して蒔蒔の刺身かな
コスモスの道来て墓前祭の男
千種民権祭 二司
去らぬ一鵝秋に早めし五年祭
庭師入り秋の彼岸のせはしなし
庭師来ずなりて深まる庭の秋

緑立つ

鈴木石花

一人来し悔い千本の花万朶
千本の花の下来て忠治の温泉
さくらどき同窓七人日光に
イタリアの大使山荘雪残る
明治館謂れの冊子緑立つ
鶯や匠てふ名の蕎麦屋選る
花疲れ癒す人間ドック入り

しらかしの森

山路紀子

ちちははのこゑの聞こゆる花の下
一本の回向柱や緑立つ
先頭は日本武尊か鳥帰る
ふらここの老女を乗せて軋みけり
特急の通過を待てり草の絮
担任はまりこせんせいチューリップ
しらかしの森のむらさき華鬘草

明史忌 岩木 茂

明史忌の仏坐りの辛夷山
足元に明史忌の海来てゐたり
明史忌の雀子雀野山空
ひととせはたやすく過ぎぬ初蛙
亀鳴くや俗名石に刻まれて
飄々と風のつきくる蕨採り
残花散る巡礼古道の潦

卯月野 相沢有理子

ありなしの風にほころぶ小米花
つばくらめ自在や海運倉庫錆び
野遊びや児の純白のベレー帽
馬場うちら悍馬なだむる声のとび
起き臥しに痛む総身リラ咲くに
母凛と江戸つ子かたぎの菖蒲風呂
卯月野や湯治場の犬あとさきに

春愁 中谷葉留

上と下かみしもと呼び合ふ村の長閑けしや
打鳴らす江戸和太鼓や法然忌
茎立や麻布十番街の窓
春愁や一枚硝子に人動き
逃水の旧国道に入りけり
つばくからや病院前の停留所
一本のさくらへつづく轍かな

葦焼 小林輝子

足火照るほど若草を踏みにけり
葦焼く火黄泉つ火よりも朱からむ
浄火とも業火とも葦焼かれゆく
雉子啼く神割り給ふ岬かな
磯畑の網の破れ目葱坊主
茶柱の長き一本匂鳥
北寄りのしづ枝の桜濃かりけり

緑さす

— 外川 怜子 —

空の鍵外すさくらの天となり
さくら待つ能代の人に雨二日
ほたるぶくろ咲く含羞の命なり
亀鳴けり母に抱かせてラヴェタ母の棺に若き父よりの手紙
料峭のうすむらさきに日暮くる
沖の灯の一つは消えず蟹走る
涅槃会のほとけに近く坐りけり
櫛の歯の素直にとほる仏生会
一病の棲みつきてをりみどりさす
デッサンの椅子一つある薄暑かな

山河集

同人作品



神蔵
器選

心臓はひとりにつちユーリップ
鳥帰る明日定年の机拭く
鎌倉はいつ訪ふも虚子忌かな
嫂は暗算上手燕来る
憲法に愛の一字昭和の日

豎山道助

一の枝の揺れ高みゆく桜かな
方丈の妻が顔出す春障子
安らげるところ天心揚雲雀
揚雲雀句座の真上に来たりけり
春の汗拭ひて虚子の忌なりけり

根岸善行

春風の水族館に水届く
船でゆく大阪城の花見かな
虚子の忌のつば広帽の漢かな

浅田光代

朝ざくら好きなことだけして逝かれ
葉桜となりて老幹艶めきぬ

奥山絢子

み仏に初花の冷えありにけり
姥二人座して見てゐる桜かな
春シヨールチャイナタウンに紛れけり
かるかるの旅の鞆や水馬
花満月くらきを水の過ぎゆけり

下山田美江

街角の時計十四時蝶生るる
青柳や「人間環境学部」棟
白と黄と家並の丘や石鯨玉
青鷺の樹上にありて墨絵めく
瑠璃光殿車返しの桜かな

◇特別作品◇(抄)

六浦道 むつらみち

下山田美江

関 八 州 武 蔵 六 むつ 浦 うら 桃 の 里
永 ぎ 日 や 机 上 に 相 模 の 街 道 図
惜 春 や 古 地 図 に 塩 の 六 むつら 浦 の 津 つ
燕 来 る 政 子 勸 請 の 弁 天 社
六 浦 津 古 刹 遺 構 や 鳥 帰 る
鱈 東 風 船 中 問 答 着 岸 寺
松 一 樹 船 繫 ぎ 跡 の 涅槃 寺
兼 好 の 草 庵 跡 や 茅 花 流 し
鎌 倉 や 鄙 の 十 二 所 桃 の 花
桜 咲 く 源 氏 の 鎌 倉 雪 の 下

風土独語／神蔵器



鎌倉はいつ訪ふも虚子忌かな

豎山 道助

虚子忌は四月八日、昭和三十四年、八十四歳、鎌倉原の台の虚子庵にてその生涯の幕を閉じられた。

掲出句は、作者が鎌倉を訪れるのは、いつもきまつて四月八日の虚子の忌日であるというのではない。勿論、当日であればよろしいことに決まっているが、たとえその日でなくても鎌倉に来れば、一年中、春夏秋冬、作者にとつてはいつも、いつでも虚子忌ということであろう。

虚子は亡くなった年の三月三十日、最後の句会に
春の山屍を埋めて空しかり

と作つた。これは当日の句会場の掛軸の「鎌倉懐古」という漢詩に想いを発したものとわれている。しかし、虚子の胸中には、遠山に日の当りたる枯野かな

枯野につづく果のはるかな遠山に日の当っている明るさ、暖かさ、壮大な未来を虚子は頼もしく眺めていた。

方丈の妻が顔出す春障子 根岸 善行

春障子がいい。こういう作品は季語の使い方が一句の生死を決

定する。障子は年間を通して使用されるものでありながら、これを冬の季物と定まった感覚はよく解り納得もしているが、もし掲出句が冬障子であれば誰も採らないであろう。

この方丈の妻は菩提寺の住職の妻、作者の声を聞きつけて、仕事の手を止め、座つたままふり向いて「……」返事より先に障子を少し開いて顔を見せたのであろう。作者の訪問は勿論寺に用事があつてのことだが、法事の依頼か、直接仏事にかかわる用事ではないかも知れない。方丈の妻にも梵妻とか大黒さんといったかたさがなく、普通の在家の奥さんのような親しさが感ぜられ、総体的に暖かな雰囲気である。これ等はすべて春障子の働きであつて、さり気なく、自然に見えれば見えるほど作品に深まり、滋味が出る。

春風の水族館に水届く 浅田 光代

この水族館は世界最大級、ジンベエザメで有名な大阪市港区天保山にある海遊館である。環太平洋火山帯と環太平洋生命帯をコンセプトとして巨大水槽で環太平洋の海を再現するという、従来の水族館の印象を劇的に変えた水族館である。

海遊館ガイドによれば、海遊館の水槽には一万一千トンの海水が必要で、オープンのときは和歌山県日ノ御崎の沖合約二十キロの地点、水深約五メートルの海中より取り、二千トンの専用船で七回に分けて運び入れたという。水は循環させて使用しているそうだが、それでも海水は減つてゆくので、月に二千トンの海水を随時補給するそうである。

掲出句は丁度、和歌山の黒潮が通る潮岬の沖で海水を汲んだ海

水運搬船が着岸し、水族館に給水しているところに出合い、現場
を見ることが出来たようだ。

海遊館にはジンベエザメの他に五八〇種、三万点以上の生きも
のが飼育されている。彼等にとって新鮮な黒潮の海水は生命そ
のものであり、春風の給水の水音は歓喜のどよめきである。

風土集



神蔵 器選

さくらさくらどに坐しても上座かな 東京 柴田 久子

虚子忌かな巻き上げて食ふスパゲッティ

春愁や糸付紅茶の糸垂れて

風船につながれてゆく母子かな

鳥引くや山総立ちて見送れり

たんぽぽや大阪城の巨石割り

熊蜂の羽音近づくと読書かな

花の日の狐の嫁入りに出会ふ

落柿舎の屋根に人ゐる遅日かな

子に遺す一冊の本朴咲けり

我が家ここの声はつらつとつばくらめ

美智子妃の結婚記念日つばめ来る

人はみな黒子に徹し万灯火焚く

三月や鳥居の笠木雪を出る

人数のふえてゐたりしさくら餅

秋田

工藤ミネ子

東京

柴田 久子

高槻

浅田 光代

川崎

豎山 道助

五條

上辻 蒼人

さいたま

須藤美智子

日の道や暮るる間際の春入江

雛流す生れしままの里に住み

うす曇る阿太の里雛流す日は

雨降り三味線草を弾きつつ

軽々と浮びし沢の山ざくら

谷戸に未だ硬き風吹く花木五倍子

雪嶺の輝く日なり剪定す

林中を栗鼠のさ走り木々芽吹く

一の矢の桜吹雪をつらぬけり

逃水を追うて来たれば三轟山

汝等の虚子忌我等の啄木忌

春愁を積みては降ろすエレベーター

くれなゐの力チューリップの力

4・3・2・1・0 発射鳥雲に

鞆や今日は茄子の馬車を駆り